

——「アラスター」を中心として——

## 1

シエリ (P. B. Shelley) (一七九二—一八二二) は必ずしも早成の詩人ではなかつた。彼が最初の問題作「クイーン・マップ」(Queen Mab)を書いたのは、多分一八一二年二十才のときのことであつたが、これとて、「詩の形で書かれたゴドウィン (William Godwin) 理論にほかならず、それについた散文の註はゴドウィンの引用か要約である」<sup>①</sup>。こうして、彼の眞の詩人的生涯は、一八一五年秋に書かれ、翌年三月に出版された「アラスター」(Alastor; or, The Spirit of Solitude) をまづつてはじまつたと云われるが、この詩については、解釋上、種々の問題があつて、いまなお、學者、批評家のあいだに論議が絶えないようである。

この詩は、まず、「私」すなわち作者自身が自然に呼びかけてその靈感を求め、五十行に近い序詩にはじまり、一人の詩人の悲劇的な生涯が、約六百二十行にわたつて「記述的」に描かれている。「孤獨のうち生き死に歌つた」(He lived, he died, he sung, in solitude)<sup>②</sup>この詩の主

シエリ

## 森 清

人公たる詩人は、「おごそかな幻」(solemn vision)<sup>③</sup>と「輝ける銀いろの夢」(bright silver dream)<sup>④</sup>とによつて幼年時代をやしなわれる。知識の泉を汲みほしてあくことをしらない。少年時代がすぎると、冷たい家庭の爐端を去つて、未知の國に珍しい眞理をさがし求める。自然の懐——先人未踏の深山幽谷に分け入つたのち、さらに、高邁な思索に驅られつつ、ギリシア、シリア、イェルサレム、バビロンからエジプト、エチオピアまでも古代文明の跡を訪ねて、「時の誕生の心ときめく祕密」(the thrilling secrets of the birth of time)<sup>⑤</sup>を知る。その間、一人のアラブの少女が、自分の食物を彼に與え、彼のために臥所を作り、彼の眠りを寝もやらず見守るが、自分の戀をよう打明けず、月の光のうすれゆく明けがた、思い亂れてさびしく家へかえつてゆく。詩人はこの少女のやさしい愛情に氣づかないかのように、なおも放浪の旅をつづけ、アラビア、ペルシア、ケルマ (Kenna) の荒野を經、インダス (Indus) 河やオクサス (Oxus) 河の水源地方の高峯を、よろこび勇んで越えてゆく。こうして、カシミヤ (Cashmire) のさびしい谷の奥ふかく、香り高い樹

木が自然の緑蔭をつくつているところ、飛沫をあげてきらめき流れる溪流のかたわらに疲れた足をやすめているとき、詩人は幻のおとめ、「覆面の處女」を夢みる。——風にゆらめくうすぎぬの下に燃えている彼女の四肢、さしのべられた裸の腕、夜風になびく黒髪、かがやく眼、ふるえているひらいた唇。——狂おしい身振りと、息きれぎれの短い叫びをあげて詩人をかきいだく處女の「身も心もとかす腕」。夢幻のうちに相抱いた「覆面の處女」を覺めてのちも追い求める。

Alas ! Alas !

Were limbs, and breath, and being intertwined

Thus treacherously ? Lost, lost, for ever lost,

In the wide pathless desert of dim sleep,

That beautiful shape !

(ll. 207—211)

あゝ あゝ

ふたりの四肢 息吹 生命が相結ばれたのは

いつわりであつたか あゝの美しいすがた

おぼろなる眠りの廣々とした道なき荒野に

永久に消えはてて

美しい幻を求めて、晝も夜も休むことなき追求はなおもつづけられ、詩人は中央アジアを放浪する。四肢はやせ衰えて骸骨のごとく、蓬々たる髪は秋風に鳴り、ただ眼光のみが爛々と光るばかり。山がつかつて彼を見て「風の精」と思い、幼児は彼の眼光に恐れをなして母の袖にかくれるが、年若い乙女たちだけは、本能的に彼の人知れぬ苦惱を理解し、彼を見や友と呼び、彼の蒼白い手を握り、涙にかすむ眼で、去りゆく彼を見送るのである。こうして終にコラスミア(Chorasmia)のさびしい海の岸邊に歩みをとめ、白鳥の巢に歸りゆくのをうらやむが、死のかなたに幻

の處女が見出されるのではないかと、一艘の小舟にのつて大海にのりだしてゆく。舟はコーカサス(Caucasus)のふもと、洞穴の中を通つて、渦巻きながら高まつてゆく流れにのり、林間の水靜かなる水溜りにとまる。水面に姿をうつす可憐な野の花で、蓬々たる髪を飾らうとも思うが、たちまち、さきに相抱いた處女のことと思われて、心に歸つてくる孤獨感から、それをさしひかえる。詩人はやがて谷間の森に入り、そこに自分の墓を見出そうとする。泉にうつる亡者のような自分のすがたを見るが、草木や風のそよぎ、小川のせせらぎなどを聞いてみると、自然の靈がかたわらに立つているように思われる。が、しかし、心の奥にかがやく「覆面の處女」の二つの眼に導かれて、なおも流れのほとりを歩いてゆく。林間の空地にさしかかるところ、彼は命且夕に迫つたことを知る。年老いた松の粗い幹に瘦せおとろえた蒼白の手をおき、薦かざらに蔽われた石の上に疲れた頭を横たえるが、今は、希望も絶望も眠り、死の苦痛恐怖も彼の安息を亂さない。瀕死の彼の眼に映るものは、西空にかかる大きな弦月であるが、この月の落ちゆくと共に、彼の脈搏もしいに微かになつてゆく。はじめにかえつて、この詩の五十行以下に述べられていのように、詩人の時ならぬ墓を敬虔な尊敬をもつて建てる人もなく、ただ秋風が朽ちゆく屍の上に枯葉の山をきざくばかり。彼のさびしいおくつきを花や糸衫で飾つてくれる乙女もなく、孤獨の詩人も、彼のさびしい運命を歌つてくれない。最後に約五十行にわたり、作者の哀歌があつて、この詩は終つてゐる。

以上、簡単な梗概からもわかるように、この詩に描かれた詩人は、知識の泉を汲んでなお満たされず、自然界に、人類の古代文化に眞理を求

めて、放浪をつづけるうち、夢に「覆面の處女」と相抱擁することによつて、忽然として人間愛に目覺め、それからのちは、この「處女」を死にいたるまで追求する。この空しい追求的となる「覆面の處女」は、そもそも何をあらわしているのであろうか。「アラスター」というこの詩の題名が、ギリシア語で、「復讐の精」或は「悪靈」を意味していることを考慮しても、それはやはり文字通り理想の處女であるのか。それとも、人間愛（例えばアラブの少女の戀のごとき）を拒否した冷たい詩人に對する「復讐の精」であり「悪靈」であるのか。この問題は、ただちにこの詩の解釋、作者の意圖、謎めいた詩の題名の解明といつたこの詩の根本問題にふれるだけに、從來種々の解釋が試みられており、わが國でも矢野博士のすぐれた研究がすでに發表されている（一九三七）。<sup>⑥</sup>まことに博士も云われるように、この詩は「その珍奇な表題が内容を暗示し、更に序詞が作意を説明せるにもかかはらず、作品其物の與ふる感銘は必ずしも純一ならず、時としては、題意序言と一致せざるが如き印象を残す事さへある」<sup>⑦</sup>のである。

博士は、詩人を誘つて人間界から引きはなし、自然と孤獨のうちに死なせたものは、「覆面の處女」の幻ではないか、

The spirit of sweet human love has sent

A vision to the sleep of him who spinned

Her choicest gifts. (ll. 203—5)

やさしい人間愛の精神は

最上の贈物をも一蹴した人の眠りに

一つの幻を送つたのだ

とあるように、この幻、すなわち「覆面の處女」こそ、「最上の贈物」

（アラブの少女によつて代表される單純素朴な愛）を拒否された人間愛、「今迄無視された人生、虐げられた人間愛」が、冷血漢たる詩人に復讐しようとして送つた悪靈であり、詩人を死と孤獨に導く復讐魔ではないか、この幻が「覆面の處女」として、その正體が明らかにされていないことは、多分に欺瞞的、妄想的なものを含む一方、それが夢の中に示されたこと、しかも夢の中で合歡したと思われれることと共に、その蠱惑性、妖魔性を表わすものであり、また、幻の處女が詩人であり音楽家でありまた思想家でもあつて、その好む話題は眞理、徳、自由などであつたと、作者シェリーにとつても理想的と思えるような女性に描かれてゐることは、この幻の處女の魅力を主人公たる詩人にいつそう強く感じさせんがためではなかつたかと云つていられる。そしてこれは、この詩につけられた作者自身の序文の一節とも、たしかに、一致するように思われる。「詩人の自己中心的な孤獨性は、彼を速かな破滅へと追いつめる抗いがたい熱情の怨靈によつて復讐されたのである」<sup>⑧</sup>。

## 二

ところで、この問題については、その後（一九四八）、ベーカー（Carlos Baker）<sup>⑨</sup>が異つた解釋をおこなつている。彼は詩そのものだけでなく、詩と序文との關係、序文の問題からさらに題名の問題にまでさかのぼらうとしているが、とくに序文にふれている點で、われわれの新しい關心と興味をひくであらう。詩そのものと、序文の一、二の文章との間に明らかでない違いがある。序文の第二の文節（paragraph）は、「呪いのモティーフ」（curse-motif）が詩のうちに働いてゐることを暗示している

が、序文の最初の文節にも、詩そのものにも、そうした暗示を支えるものはないというのである。もつとも、なんらかの意味で、このような矛盾にこれまでもふれるものがなかつたわけではない。キャムベル夫人(O. W. Campbell)は「序文に於ては青年は非難されているが、詩に於ては稱讃されている。」と云い、ホワイト(N. I. White)はさらに、「序文を讀まなかつたら、作者がこの詩を自己の批判として書いたと思うものは、一人もないだろう。」と述べている。

さて、ベーカーによれば、大體次のようなことになるであろう。問題の論點は、シェリーがこの詩を書いたとき意圖したものが、夢みた理想の處女を追い求めるたぐいなき一青年の物語であつたか、それとも、その青年はなんらかの意味で罪を犯したのであり、處女の追求は刑罰として課せられたものであつたかということである。簡単に云えば、さき述べたように、「覆面の處女」は理想の處女であるか、復讐の妖魔であるかということになるであろう。ところで、まず第一に、詩そのものの中心のモチーフは「追求」(quest-motif)であつて、「復讐」や「呪い」ではなく、また、序文の第一文節には復讐の孤獨の精を暗示するようなものは、何一つ含まれていない(とベーカーは云う)。そして、矢野博士もあげていられるこの詩の二〇三—五行について、ベーカーは次のように述べているのである。「詩では、その幻が、いままで、『最上の贈物』を一蹴してきた青年に、『やさしい人間愛』によつておくられたものだ」と述べられている。呪いのモチーフから云えば、これらの言葉は、幻が懲罰の目的でおくられたことを暗示するであろう。しかし、もしこの詩がアラスターの主題を知らずに書かれたものであるならば、

(そして、これがベーカーの所論の重要な基盤となるのであるが)、これらの詩行はただ、長い間哲學的思索にふけていた青年が、自分がかれまで愛を無視してきたという考えに突然目覺めたことを、意味するだけであろう。」したがつて、ベーカーによれば、詩の題名と序文の第二文節を別にすれば、詩そのものは、序文とも相應じて、理想の處女の追求を主題としたものと解して、些かも差支えないのである。しかもこの題名と序文の第二文節そのものに問題があるのであつて、この詩の解釋の混亂の多くは、題名に關するピーコック(T. I. Peacock)の一般に誤り解されている説明と、この友人の命名を正當化し、詩に道德的教訓を興えようとして、作品の完成後にシェリーが企てたらしい序文の文節にまでさかのぼられねばならない。ところでピーコックは、恐らくはこの詩の完成後に題名を暗示したらしい。シェリーは「題名に迷つていた。そこで、ぼくは、彼が採用したものの、『アラスター、即ち孤獨の精』を提案した。『アラスター』というギリシア語は惡靈である。……この詩は惡靈としての孤獨の精を取扱つたものだ。『アラスター』が主人公の名だと思つた人がこれまで随分とあつたから、ぼくはこの言葉の眞の意味を述べたのだ。」ピーコックのこの説明は、「アラスター」を詩人の名前だと誤解していた人々の蒙を啓くことに役立ちましたが、一方、詩のうち呪いのモチーフが働いていて、幻の處女は「復讐の精」として、懲罰的な意圖をもつて詩人の許におくられたものであるとの解釋を促すことになつた。そして、この解釋では、いふまでもなく、詩人は人間愛を無視したために罰せられたのである。

ところで、ベーカーの検討するところでは、「孤獨」(solitude)とい

う語は、この詩の中で三度用いられているが、いずれも「悪」として表わされてはいない。おそらくは、「復讐の精」というギリシア語の概念は、詩作中のシェリーのころになかったのではないであらうか。文字通り「題名に迷つて」、彼はピーコックのむしろ難解なこの暗示に従つたものであらう。そして、詩の本文そのものを改めることなく、新たに採られた題名にかなうように詩を説明しようとしたのであらう。この試みは、序文の第二の文節に含まれている。この文節には、明らかに矛盾が見出される。すなわち、その第二の文 (sentence) と第九の文とに喰い違いがあるという。第二の文章、「詩人の自己中心的な孤獨性は、彼を速かな破滅へと追いつめる抗いがたい熱情の怨靈によつて復讐されたのである」<sup>⑭</sup>は、第九の文章では、「人間の同情なしに生きようと試みる人々のあいだで、心清くやさしい者が、おのが魂のうつろさを突然自覚するとき、そうした同情ある交わりを求めるはげしい熱情のために滅びる」<sup>⑮</sup>と、その概念が擴張されている。そして、最初の文章は、たしかにピーコックの「アラスター」を主張するものである。しかしながら、あの文章では、詩人は「心清くやさしい」者であり、ただ「はげしい熱情」のために滅びゆくのであつて、二つの文章は、必ずしも論旨を同じくするものではない。「自己中心的」な孤獨の詩人は、「心清くやさしい」人ではほとんどあり得ないであらうから。

こうして、ペーカーは、最初の「抗いがたい熱情の怨靈……」の文章を、ピーコックの提案した題名を正當化せんとして、作者シェリーが挿入したものでないかと推測し、題名として選ばれたギリシア語は、作者が詩に歌いあげたものに適しなかつたのだとさえ主張したいかのよう

ある。詩に於て詩人を驅りたてる眞の力は愛そのものにほかならない。一人の多感な詩人の愛を求めてやまない情熱のはげしさを、多かれ少なかれ象徴的に示さんとしたのが、この詩であつて、呪いのモチーフは、詩の完成後に加えられたと思われる題名と序文に見られるだけである。それは詩そのものの外にある。ペーカーの所論を要約すれば、大體以上のようになるであらう。

### 三

ところで、わたくしの當面の問題は、以上の問題と取組んでこれを解くことではない。それは、とても及ぶところではない。題名と序文との關係に對してなされたペーカーの推測には、かなり大膽なところがあるようにも思われるが、この詩の序文は、なお興味あるものを含んでいるようである。グリアソン (Herbert J. C. Grierson) のごとく、「序文も (後の版に加えられた) セント・オーガスティン (St. Augustine) からのモットーも、この詩の内容や精神とは、大して關係がない」<sup>⑯</sup>と云つてしまえば、それまでのことであらうが、もしわれわれが「その詩と序文との間に微細な關係を見いだす試みを放棄してはならない。というのは、序文は或る意味が意圖されたことをわれわれに知らしめるからである」<sup>⑰</sup>とすれば、この序文の問題は決して輕視できないであらう。それでは、この詩の序文とは、一體どのようなものであらうか。

まず、「アラスター」と題するこの詩は、人間精神のもつとも興味ぶかい状態の一つを寓意化したものと考えられるかもしれない。<sup>⑱</sup>——(一)——でこの序文ははじまる。主人公たる青年は、淨らかな感情と冒險的精

神とに富んでいて、立派で壮大ならゆるものと親しむことによつて燃やされ浄められた想像力に驅りたてられて、宇宙について思いをひそめるにいたる。知識の泉を飲んで飽くことを知らない。外界の壮大な美しさがこころに深くいりこんで、盡きることなき潤いを興える。彼の望みがこころした限りない對象に向けられているうちは、彼は喜びにあふれ、おだやかに、おちついていることができる。「しかし、こころした物に満足できなくなる時期がくる。彼の精神はついに突然目覺まされて、それと似た知性と交わることを渴望する。彼は愛する『人間』をわれとわがところに描くのである。」<sup>⑧</sup>——(二)——彼が想像するこの幻は、崇高完全なものの思索とまじわつて、詩人や哲學者や戀人が描き得る一切のもの、驚くべきもの、賢いもの、美しいもの一切を統合し、知的、想像的、感覺的、すべての條件に答えなければならぬ。「詩人はこれらの條件を合せて、ただ一つのイメージに附與するものとして表わされる。彼は自分の想像の原型をむなしくさがしもとめるのである。」<sup>⑨</sup>——(三)——彼は失望のうちに死んでゆく。

以上が序文の第一文節の要約であるが、(一)——(三)の内容は、ほぼ、次のことを意味していると解せられぬであろうか。すなわち、詩人の愛の渴望は、詩人その人の自覺のかたちをとり、對象は、詩人がわれとわがところに描くイメージであり、詩人自身の想像の原型であること。さらに、こころした理想家肌の詩人が描くイメージは知的、想像的、感覺的ならゆる條件をみたすものでなければならぬ。それは、ひつきよう、「理想」であるが故に、その追求は現世に於ては永久に空しいこと。

さて、問題の第二文節は次のようである。「こころした描寫は現實の人に教えるところがないわけではない。詩人の自己中心的な孤獨性は、彼を速かな破滅へと追いつめる抗いがたい熱情の怨靈によつて復讐されたのだ。しかしながら、その働きを微妙に感知させることによつて、この世の光を突然の暗黒で打消すあの力は、その力の支配するところを永久に去ろうとする卑しいところの人々を、徐々に毒して墮落させてしまふのである。」<sup>⑩</sup>——(四)——こころした人々の運命は、過失がいつそう卑しむべきものであり、いつそう有害であるがゆえに、いよいよ卑しいものである。「高潔な誤ちに惑わされることなく、疑わしい知識に對する神聖な渴望に刺戟されることなく、かがやかしい迷信にだまされることなく、この世の何ものをも愛せず、あの世になんの希望も抱かず、しかも、同胞と共感することなく、人間のよろこびも人間のかなしみも分らぬ人」<sup>⑪</sup>——(五)——こそ呪いをうけるのである。彼らは精神的に死んだも同然であり、友でもなく、愛人でもなく、人の親でもなく、世界市民でもなく、自國を益する者でもない。「人間の同情なしに生きようと試みる人のあいだで、心清くやさしい者が、おのが魂のうつろさを突然自覺するとき、そうした同情ある交わりを求めるはげしい熱情のために滅びるのである。」<sup>⑫</sup>——(六)——他のすべての人々、利己的で盲目的で鈍感な人々は、自分ばかりでなく、この世を不幸に陥れるのである。「同胞を愛さない人々は空しく一生を送り、老齡のためにあわれな墓を用意する。」<sup>⑬</sup>——(七)——

この第二の文節に於て、われわれは次の諸點に注意しなければならぬであろう。(四)に於て「詩人の自己中心的な孤獨性」云々の文章は、

ペーカーによれば、後程挿入されたものだろうというが、その推測の適

否は別として、作者の論點はむしろ、それ以下の文にあることが知られるであろう。その意味でこの「しかしながら」の接續詞は千鈞の重みがある。これは詩人に對する非難ではない。この世の光とも云うべき人々（詩人は、もちろん、このうちに數えられるであろう）を突然の暗黒で（詩人を速かな死に追いやつたように）打消す力、すなわち愛に目覺めない多くの人々こそ、（五）に述べられた「人間のよろこびも人間のかなしみも分らぬ人々」であり、年若い（詩人の短命と異つても）、みじめな死をとげねばならぬ人々（七）であろう。作者が、「こうした描寫は現實の人々に教えるところが無いわけではない」といつた、その現實の人々に對する教訓は、主としてこうしたところを指しているのではないであらうか。すなわち、ここで作者が問題としていることは、愛に目覺めるか、目覺めないかである。たとえ速かな破滅に追いつめられるとしても、ひとたび愛に目覺めた詩人は、「心清くやさしい者」（六）なのである。しかも、さきに「自己中心的」だと云われた詩人が、ここでは、「人間の同情なしに生きようと試みる人々のあいだで……：……：……：……」とした同情ある交わりを求めるはげしい熱情のために滅びる」のだと、まるで、無情な世の人々が詩人を殺したのだと云わんばかりの口吻である。序文の最後に添えられた

The good die first,

And those whose hearts are dry as summer dust,

Burn to the socket!

よき人々はさきに死に

こころ夏のちりのごと乾けるものら

ソ     フ     リ     ー

燃えつきる

とのワーズワス (William Wordsworth) の「逍遙遊」(The Excursion) からの引用は、なによりも、上に述べた作者の心情を物語るものである。詩人は「よき人々」の一人であり、その「速かな破滅」は、「考齡のためにあわれな墓を用意する」——「燃えつき」てゆく人々との對立に於て、明らかに正當化されてさえているのである。そのかぎりに於て、キヤムベル夫人の「序文に於ては青年は非難されているが、詩に於ては稱讚されている」という印象は、必ずしも正しくないのではなからうか。そして、ペーカーが問題としている一節、「詩人の自己中心的な孤獨性は、彼を速かな破滅へと追いつめる抗いがたい熱情の怨靈によつて復讐されたのだ」は、（いろいろと象徴的な意味に解することができるかもしれないが）文字通りにとれば、たしかに、序文全體の主調からはずれているようであり、ピーコックの説明から、この詩の完成後、彼の提案によつて採用された題名を正當化せんとして、作者によつてのちに加えられたものではないかとのペーカーの推測も、簡単に却けることができないように思われる。この詩人にとつては、序文の前半にも述べられているように、愛は覺醒のかたちをとつて現われるのであるが（詩の二〇三—五行も、一應ペーカーのように、「長い間哲學的思索にふけていた青年が、自分がこれまで愛を無視してきたという考えに突然目覺めたこと」を意味するものと解して差支えないのではないだろうか）、それは、彼に於ては、知的、想像的、感覺的な諸々の條件を統合した、理想の光につつまれた原型そのものの追求を意味する。（詩の一五八行以下、幻の處女が音楽家で詩人で思想家で、知識、眞理、美徳、自由、詩

などについて語つた云々というところは、そのまま、ここに照應するのではなからうか)。追求する「覆面の處女」は、文字通り理想の處女なのではないだらうか。それは、詩人が自らのところに描いて眞實と信じた以上、それに對してどんな批判が許されよう。たとえ、詩人が「速かな破滅」に至つたとしても、少くとも詩人にとつて、愛の覺醒が眞實であり、それがはげしい、ひたむきな、なにものをも恐れない情熱であつたことを、作者は強調しているであらう。詩人の死がむしろ讚美されていることはすでに述べた通りであるが、シェリーが詩人と對立するものとして、世の「高潔な誤ちに惑わされることなく、疑わしい知識に對する渴望にも刺戟されることなく……この世の何ものをも愛しない」人に非難のほこさきを向けるばあい、それらの項目が肯定のかたちで、詩人の體験として、むしろ是認されている點からも、「復讐」の意義はいよいよ薄弱となるように思われるし、キャムベル夫人が序文から讀みとつたものは、必ずしも、作者の意圖したものでなかつたように思われる。

四

さて、ストヴォール (Floyd Stovall) は、この詩について次のように述べている、「この詩に於ける作者の第一の目的は、彼が序文の中で説明しているように、描かれているような種類の理想に獻身することの價値と危険とを、他の人々に教えることであつた。」<sup>②</sup> これまでの検討からわかるように (それは、主として序文の側からなされたものではあつたが)、上の文中、「危険」よりは「價値」の方に重點がおかれるべきであらう。理想の追求は、たとえ幻滅と失望におわりとも、人間の幸福

に必要なものである。打算的にその「危険」を慮り、理想を避ける冷たい人々こそ、むしろ、人生のよろこびを知らない人といふべきである。詩人がはじめ人間愛をしりぞけたがために復讐されることによつてではなく、一たび愛に目覺めた詩人が、死にいたるまで理想を追い求める、その情熱のはげしさを肯定することによつて教えられる、理想の「價値」である。しかし、ここに、いま一つの問題があるように思われる。はたして作者は、何かを「他の人々に教えること」を第一の目的としたのであらうか。シェリー夫人がこの詩につけた註のなかで云つてゐるように、たしかに、「アラスター」は『クイン・マップ』とは全く違つた調子でかかれてゐる。後者に於て、シェリーは、青年時代にいだいたすべての思想——同胞たちの現在の苦しみ、彼が當然の運命だと考へるものから生ずる同情、非難、希望といつた抑えがたいあらゆる感情を吐露したのである。これに反して、『アラスター』の内容は、ただ、個人の興味だけである<sup>③</sup>のである。そして、「この詩が根本的に自傳的なものだと思へる必要がある」のは、ハムレットがシェイクスピア自身の理想化された姿として描かれたものだと思へる必要がないのと同様である。<sup>④</sup>このベーカーの言葉にもかかわらず、わたくしは、この詩を「魂の自傳」(Spiritual autobiographies)の項目に入れて分類したスペンダー (Stephen Spender) の鋭い詩的感受性に敬意を表さざるを得ない。詩に描かれた詩人のように、シェリーもまた、自分のうちに眼を向け、自分の魂の思想と感情とに思いをひそめるようになったのであらう。「意識的」とも云へる孤獨の状態に於て、自分自身を見つめ、自分を理解しようとする。詩人は自分のところに描いた幻を追い求める。シェリーもまた、その短かい一生



を通じて、一つの理想を空しく追い求めた人であつたと云えよう。なによりもわれわれの關心をひくものは、彼が詩のなかで、自分の似姿を、自分の愛するものを、追い求めようとしているのではないかということである。「彼は『アラスター』の奇妙な、水のような、姿をうつすイメージの上に身をかがめて、そのうちに映つた自分の姿を見ているのではないか、それだから、この詩は、實は、ナーシサス(Narcissus)が自分自身を愛する流れなのではないか。そして、彼が出會うものは、自分自身の姿のほか何ものをも求めることのできない水の中の死なのである。」しかも、一方、少くとも、創造の瞬間に於ける詩人シェリーの魂は、自分の過去に對して、悔恨の念や憐愍の情にかられてはいない。生き生きとした、嚴然たる心象を見、それを機械のように正確に、自動的に記録しているのである。われわれは「記述的」ともいふべき客觀的な描き方を、その意味でも見逃してはならないであらう。もちろん、ストヴォールやシェリー夫人も指摘するように、「教訓的」なものがないわけではない。それにしても、これを第一の目的として押したてるのは、いささか行きすぎではないであらうか。そういえば、シェリーのごとき詩人に於ては、すべての詩、その抒情詩さえも、「教訓的」と云えるであらうから。結局、詩の最後に歌われているように、シェリーは、この詩人を——愛する自分の似姿を、ただ藝術の力によつて、不朽にすれば足りたのであらう。この詩の序文の第二文節に於ける「現實の人々」に對する教訓でさえ、強調されすぎているくらいがないであらうか。

ところで、シェリーが序文のことで、「現實の」人々を問題としていふことに注意されねばならない。それは、單なる偶然でもなければ、思

いつきでもない。それは、シェリーの詩的態度の本質にふれるものを含んでいるのではないであらうか。よく云われるように、われわれはシェリーの詩を読むとき、しばしば、詩そのものから、詩によつて影響されたとされる現實への思索にひきもどされる。もともと、詩人に要求されることは、詩を完成することであり、それをもつて詩人の任務は終るものと云わねばならない。しかしながら、「シェリーの詩は、詩そのものをこえて、藝術によつて影響されるかもしれないけれども、單一の藝術作品とは同一のものであり得ない事象の世界へと流れてゆくのである。」シェリーにとつては、現實の眞實と詩の眞實とを區別することは、たしかに困難であつたようであり、スペンダーの所謂詩の「崩壊」は、ここにあると考えられる。シェリーは、この過程を、「アラスター」の序文に於ける第一文節と第二文節、詩そのものと序文との間てくりかえしているのだとも云えないであらうか。ただ、「教訓」が主として序文に於てなされたがために、詩の「崩壊」は免れたのであるが、強いて序文の教訓的要素をもちこんでは、詩を文字通り「崩壊」させることにならなからうか。のちにシェリーは、「プロミシユース・アンバウンド」(Prometheus Unbound)の序文のなかで、自分は教訓的な詩がきらいだと云つたあとにつづけて、「私の目的は、これまで、ただ、えりぬきの詩の讀者の立派に洗煉された想像力に、道徳的美質の美しい理想主義を知らせることであつた。」と述べているが、この「理想主義」こそ、云わば兩刃の劍なのである。彼の想像の翼を天空高くはばたかせる力となつた「理想主義」は、同時に、地上の茨の上で血を流さねばならない。「アラスター」とその序文が含む問題は、けつきよく、こうした一

個の人間像に連なるようである。

註

- 1) H. N. Brailsford: *Shelley, Goethe, and their Circle*, p. 175.
- 2) *Alastor*, 1. 60.
- 3) 4) *Ibid.*, 1. 67.
- 5) *Ibid.*, 1. 108.
- 6) Kazumi Yano: *Shelley* (研究社英米文學評傳叢書).
- 7) *Op. cit.*, pp. 58-9.
- 8) 14) 15) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25) 'Preface' to *Alastor*.
- 9) Carlos Baker: *Shelley's Major Poetry*.
- 10) O. W. Campbell: *Shelley and the Unromantics*, p. 188.
- 11) N. I. White: *Portrait of Shelley*, p. 192.
- 12) Carlos Baker: *op. cit.*, pp. 43-4.
- 13) Cf. *op. cit.*, p. 45. (Quoted from *Memoirs of Shelley in Works of Thomas Love Peacock*)
- 16) Herbert J. C. Grierson: *A Critical History of English Poetry*, p. 355.
- 17) Cf. Carlos Baker: *op. cit.*, pp. 42-3. (Quoted from H. I. Hoffman: *An Odyssey of the Soul*)
- 26) Floyd Stovall: *Desire and Restraint in Shelley*, p. 149.
- 27) Notes on *Alastor* by Mrs. Shelley.
- 28) Carlos Baker: *op. cit.*, p. 48.
- 29) Stephen Spender: *Shelley*, p. 35.
- 30) *Op. cit.*, p. 25.
- 31) 'Preface' to *Prometheus Unbound*.